

## むすび

歴史的にみてその民族や国土に大きくかかわりのある植物のことを民族植物と呼ぶのだそうであるが、ベニバナはまさに多くの民族、国々にかかわりを持つ多民族植物といわねばならぬ。

それを紅という染料素材としてとらえると、ベニバナはその時代の権力者への奉仕という運命下にあった作物のようで、染め上げられた色彩は華麗であり、みごとであつても、私には農民や工人達の苦勞のみがしのばれて、必ずしも称賛だけではすまされないように思われるのである。

もし、この植物性の紅を単なる赤色の染料としてのみとらえることなく、赤の持つ宗教的な不思議さや、健康保持のための医薬源としてとらえるならば話は別である。おそらく、民族植物としてのベニバナには、われわれ現代人の想像をはるかに越えた、不思議な魅力と薬効があつたのではなからうか。

凡人の私には油料作物としての伝播をどうしても打ち消すことができない。かの張騫が王のため、そして王妃のために、大きな危険をおかしてベニバナを求め荒野をかけめぐる図、フトコロにしっかりとベニバナのタネをかくし、国境を越えてゆく図を想像してみるのだが、はた

して、そこまでして紅をもたらそうとしたものであろうかという疑念の方が先に立ってしまふ。それよりは、民の命の糧となる作物のタネを求めて歩く張騫ちやうけんの姿の方がえがきやすく、命がけで母国に持ち帰るとしたら、その位の値打ちのあるものをたずさえていたのではないかと思われるのである。

しかし、現代の凡人の愚考と、歴史上の出来事とはへだたりがあつて当然。宗教的な意味あから赤を求めぬ努力は、とうてい現代人の想像しえないものであつたのであろう。それだからこそ、われわれの祖先はえいえいと紅をつくり、藍を作つてきたのであろう。

ベニバナは熱砂に咲く花である。タネの発芽から苗のステージまでは、水と湿度を求めぬもの、花が咲き実を結ぶ頃は、乾いた空気と高い温度を必要とする。そうでなければ病氣や虫に負けてしまふからである。日本人が頭にえがく砂漠の風土に近い所がふるさとと云つてよいであらう。

その熱砂にはぐくまれたベニバナが、長い長い時間経過の間に、東に移動し、西にも南にも移動した。極東の国、日本にたどりつくまで、どこを経由したのかはつまびらかではない。文物の流れをすなおにとらえれば、仏教文明の流れに従つて、中国、韓国を経由すると思ふのが最も普通であらう。現にそれを裏付けるいくつかの証拠もそろつていゝわけである。

しかし、植物の持つ力は時に偉大である。熱砂の植物が全く寒さに耐え得ないのかと思つと、実は驚くほどの適応性を示すことがある。砂漠の昼は高温乾燥の極端な気象条件下であること

は間違いない。しかし、夜は結露し、かなり気温の降下もみられるのである。

かつての取材旅行地アフガニスタンのカブールでは、冬季五〇cm位の積雪を記録することがあると聞かされて驚いた。ベニバナの野生種のいくつかをかかえるこの国は、熱砂と氷雪の両面を持つ国だったのである。北国の山形が日本一のベニバナ産地になり得たのは、この二面性ともいえるはげしい気象変化が、ベニバナに刻み込まれた生きる力を呼び起こしたからにほかならない。

つまり、今、仮にエチオピアが原産地だとすれば、トルコや中国への移動の過程で、しだいに耐寒性を身につけていったのではなく、熱砂の国で栽培されたタネを、みちのく山形でいきなり作っても、ベニバナには十分適応力があるとみられるということである。海外で得たベニバナ種子は、山形の在来ベニバナと一緒に播種しても劣るところはなく、やや高い湿度をきらうぐらいで、花が咲き、実も結ぶのである。

日本人の知らない間に、米ソのベニバナ戦争があったことがノーレス博士の論文の中に書かれている。戦中から戦後にかけて、ベニバナは「畑で採れる石油」とたとえられる位、工業油を採油する工芸作物として貴重な存在であった。米ソの間で、採油量の高いベニバナの遺伝資源を求めて、地球上の各地で調査が行われていたのである。

その頃、日本はベニバナ栽培を止め、穀物の生産に熱中していた。主穀重視の政策の下で日本のベニバナは忘れ去られようとしていたのであるが、海外ではベニバナの子実から採れる油

脂がペイント溶剤として、印刷インク用油として重視され、畑で採れる石油とまで表現されていたのである。

ところがビニールペイントの開発登場によって事態は一変した。覇をきそって生産してきたサフラワーオイルは工業用ではなく、サラダ油として、健康オイルとしての消費を拡大しなければならぬというみなおしをせまられたのである。

筆者らがベニバナの原産地調査のためインド、アフガニスタン、エジプトを歴訪したのは、ちようどその頃であった。ベニバナの原郷を求めての旅は、イソップ物語のような結末であった。「ねずみの嫁入り」という逸話は、色々尋ねあるいて行き着いたのは、ごく間近に居た同族のねずみであったということになっている。ベニバナを利用した染色の世界にあこがれ、インドやエジプトを旅してみたものの、何と、現代でも優雅な紅染めなどを楽しんでいたのは、わが山形だけであったという次第である。

そして、ベニバナとは油料作物であり、インドのごときは、搾り粕の輸出は認めても、油は、国民生活必需物資の一つとして国外輸出が禁じられていた。また、エジプトでは、パンを焼くのに一握りのベニバナ種子がまず鍋で炒られ、そこで滲み出た油がパンをこがさず焼く役目を果たしていたのである。

ベニバナの赤い花びらは、食紅風に暑い国々の人々の食物を染めていた。一杯のジュースに紅色を着けると、酷暑の中の生活では、何となくうるおいを与えてくれるものであることを実

際に体験することができた。日本では赤は祝いの色として今日でも生かされているが、炎天下の国々では、もっと身近な、日常生活での元気づけの色として赤は必要なもののように感じとれたのである。

花卉としてのベニバナはどうか。山形では昔、花といえればニバナのことを指すものであったというが、それは花べんを摘み、高値で売れる紅餅の生産が出来たからのことであつたのだらう。緑の葉を背景に、黄色から橙黄色、そして赤色と変るベニバナの頭花は、昔の人も観賞に値しないとは言っていない。ただ、花よりも換金対象となる紅のことが脳裏にちらついで、この花の持つ清楚な美しさは、農民の眼中には入らなかつたのであろう。

万葉集や、古今和歌集に歌いあげられた紅花は、「紅花染め」に染め上げられた美しい着物のことで、畑に咲くトゲのあるベニバナのことではなさそうである。

今日、国民生活の向上と共に、花卉（観賞植物）の需要が増加し、国内生産のみならず海外からの花の輸入量も増加している。一方では水稲作の休耕措置などから、それにかわるべき作物として花卉類の栽培生産が取りあげられている。その中で、夏場の切花としてベニバナは人気があり、生花として役目を終えたあとも、ドライフラワーとして長期に観賞できる利点を持つことから、カルサムスなどと呼ばれて花市場で取り引きされている。

かえりみると、ベニバナは不思議な植物である。昔は染料作物、あるいは薬草として大陸を駆けめぐり、海を渡り、途中、油料作物としてもはやされ、そして現代では人々の心をなご

ませる花卉として生き残っている。この先、どのような世界がひらかれるのか予想もつかないのだが、花摘み乙女の指を痛めつけた鋭いトゲはトゲなし品種の出現によって昔話となり、花卉としての育種研究の結果、花色も白、黄、橙黄、紫と、豊富な変化が期待できるようになった。

わが国ではバイテク技法を活かして、ベニバナの着色細胞を単離し、よりカルサミン含量の高いベニバナの品種改良に着手していると聞く。また、ベニバナの持つ黄色色素(サフロール・イエロー)は、食品などに一般に使われていた合成黄色色素の有害性が指摘されて以来、いかに脚光をあび、天然で安全な黄色色素として使用量が多くなってきている。山形県工業技術センターでは、この色素を変色しにくい安定化した状態で抽出する技術を開発したという。

消えては現れ、現れては消える、栄枯盛衰の激しいこの植物は、この先、一体どのような運命をたどるのであろう。ともかく、山形県にとっては唯一の民族植物ともいべきベニバナを、何とか絶滅させないよう、守り育てて行かなくてはならないと思う。